

市民科学

第13・14合併号

通算第26号



発行：NPO法人市民科学研究室 (Citizen Science Initiative Japan)
〒113-0033 東京都文京区本郷 6-18-1
Tel&Fax: 03-3816-0574
e-mail : info@csij.org

<http://www.csij.org/>
毎月1回発行
無料(サイトからもダウンロードできます)
編集責任者：上田昌文

【巻頭言】

防災のチェック、緊急避難・救助の訓練を 普段から重ねておこう

上田昌文(市民科学研究室代表理事)

2月23日に行われた市民科学講座「東京直下型地震 あなたはどう備えるか」がとても有意義だったので、その簡単な報告をしたい。

「事前体験調査隊になってください」との呼びかけに応じて集ったのは12名。東京・池袋にある防災館の見学からスタートした。防災館は無料でほぼ年中無休の施設であり、予約さえ入れれば参加者の都合を勘案して体験プログラムを組んでくれる(職員による丁寧なガイダンスがつく)。当日は「煙」「地震」「消火」の3つを体験したが、体験中の万一の事故に配慮していくぶん手加減してはいるものの、発生する煙の中を腰をかがめて誘導灯を頼りに避難路を見出すことがどれだけ困難か、あるいは震度6の横揺れで無防備な家具類がいかにも無惨に転倒・飛散するか、そしてどんな地域や居住区にも備えてあるはずの消火器・消火栓にこれまでほとんど注意を払わずにいて、その扱いにも慣れていなかったこと——などを思い知らされるには十分だろう。だがじつは、一番衝撃的だったのは、消防庁が製作した『マグニチュード7 東京直下 私の証言』という3-D(立体映像用)眼鏡をかけてみる20分ほどの映画だった。表題のとおり地震が東京を襲ったときの状況をいくつかの日常の場面別にひたすら映し出すのだが、これは実際に起こった地震の記録映像かと思わせるほどのリアルな演出に、立体視の効果が相まって、観ている者の身体が震え、悲鳴を上げんばかりの迫力なのだ(TV放送で流れてお茶の間で大画面でみたりすると、大騒ぎになりそうなほど、と言えよいだろうか)。これは全国放送は無理だとしても、学校や地域で誰もが簡単にみることができるようになるとよいのだが。

次に、2グループに分かれ、豊島区と文京区の地図を手がかりに、春一番の強風が吹きすさぶ中、「地震が起こったら…」を意識しながら街を観察し練り歩いた。これまで気づきもしなかったことがいくつも目に入って来た。例えば、阪神淡路大震災以後に、高速道路の耐震を補強するために、道路の側面の繋ぎ目に特殊なブロックでワイヤーがかけられていたりするのだが、それが中途のままになっているところが目につく。看板や電柱(や柱上の変圧器)などは、地震の際に倒壊したり落下したりする恐れがありそうだ。皆が避難場所に向かう際に多くの人が殺到してパニックを起こしかねないような複雑な細い路地が少ない。……これらを収めた写真をみながら、後に「調査隊」で議論をした。震災を意識して自分の住む地域を地元の人々と一緒にくまなく歩き回る機会は、今後ぜひ欲しいなと思った。

最後は、「安全に、できるだけ多くの瀕死の重傷者の命を救う」ことを目標に、CERT(Community Emergency Response Team)のトレーニ

ングプログラムを体験した。プロとしての訓練を受けた4人のトレーナーの指導で、重傷者の探索・トリアージ(選別、初期応急手当)、瓦礫からの救出(てこの原理を使い支柱で安全確保して)、負傷者搬送の3つを実施した。驚いたのは、暗い部屋で瓦礫に埋もれている複数の人(負傷者を演じる人と人形を使う)を懐中電灯で探し当て、その重傷度を判別して応急処置を施すという訓練では、それが模擬体験だとわかっていても、暗い中でうめき声などを聞いてしまうと非常に焦ってしまい、何をどうすべきかがわからなくなってしまふ、という自分を発見したことだ。この情けなさは体験してみないと痛感できない。人ひとりを搬送することもチームでの力の合わせ方を心得ていないと非常に困難であり、そして、てこの原理を生かして瓦礫などを持ち上げて被害者を救出するのも、井桁(いげた)をうまく組んで重い物体を確実に崩れないように支えること自体が決して簡単でない。実際に瓦礫に埋もれた人に向き合うことになれば、今の自分がいかに無力か、想像するだにため息が出る。

簡単な疑似体験だったが、地震の被害と混乱の事態をいくらかでも肌身に感じ、訓練を繰り返し受けることなくして危機への的確な対応はあり得ない、と確信できたことは大きな収穫だった。

これからは機会あるごとに、地震対策や危機管理のための学習や体験を自ら重ねていきたい。そして、多くの人にもそれを呼びかけたい。



CERT(地域緊急対応チーム)の訓練から



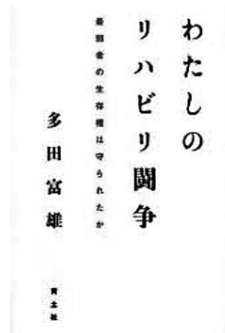
震度7で生じる想定被害規模を考える

【書評】『わたしのリハビリ闘争 最弱者の生存権は守られたか』

山本 栄美子（東京大学大学院博士課程）

本書は、2006年度に行われた、政府による診療報酬改定に端を発した、リハビリテーション医療打ち切りに対する反対を掲げた闘争の記録を綴った、免疫学の世界的権威である多田富雄氏の論説を収録したものである。構成は、「はじめに」における総括と、闘争の経緯がわかるように発表順に収録された12の論文から成っている。リハビリを続けなければ、社会から脱落するもの、生命の危険さえあるものにたいして、医療を打ち切るといふむごい制度改悪に著者は怒った。「文章を書いて抵抗することが、一障害者の私にできる唯一の抵抗であった。本にまとめておきさえすれば、この医療史上の一大汚点は、実名とともに後世に残る。私にはそれを書き残す義務がある」との思いが、不自由な体に鞭打ってキーボードに向かわせた。生命と人権を軽視した政策がまかり通る社会は、弱者を平気で犠牲にする社会、戦争に突き進んでしまう社会に直結するという危

機感も原動力になったという。人の十倍はかかる、左手一本の困難な執筆で、「非人間的な制度改定から一年あまりの間、命がけで新聞や雑誌に論文を書き続けてきた」と著者は語る。その執筆作業そのものが実は、リハビリ訓練で可能になった身体機能であった。



【→続きはホームページへ】

多田富雄『わたしのリハビリ闘争—最弱者の生存権は守られたか』
青土社2007年12月

【書評】『地域とともに、産み・育み・看とる』

尾内 隆之（立教大学教員）

市民活動に関心を持つ読者の皆さんならご存知のことと思うが、医療機関の中には「医療生協」という形のものがある。生協法にもとづく住民（組合員）の自主組織として、生活協同組合が病院などを所有・運営するもので、医療のあり方を考える上で非常に示唆を与えてくれると評者は考えている。本書は、看護師のしごとを通してその実情を垣間見せてくれる、貴重な一冊である。

折しも「医療崩壊」という言葉がメディアで盛んに取り上げられ、日本の医療体制が満足できるものでないどころか、先行き現状を維持できるかどうかという不安さえ広がっている。産科医や小児科医といった診療科において、あるいは過疎地域において顕著な医師不足。病院勤務医の過酷な勤務状況。公立病院の膨大な経営赤字……。挙げればきりが無いが、ではいったいどうしたらよいのかという出口はなかなか見えてこない。そうした問題の深刻化をもたらした要因に、政府の医療制度改革の欠陥や、医療機関が直面する経済環境、あるいは医療関係者の姿勢といった、医療のいわば「供給」側の問題があることは間違いない。しかし要因の一端に、医療を受ける側が

医療とどのような関わり方をするか、という「需要」側の問題もおおいにあるように思われる。評者が「医療生協」というかたちに関心を持ち、そこで日々営まれている医療のあり方に魅かれるのはそのためだ。医療生協も「生活協同組合」である以上、その基盤は、医療の受け手である組合員が単なる受診者ではなく、健康な暮らしを築くための取り組みに「主体的」に関わることだからである。



【→続きはホームページへ】

医療生協さいたま看護部編集委員会・編著『地域とともに、産み・育み・看とる』
コープ出版2007年12月

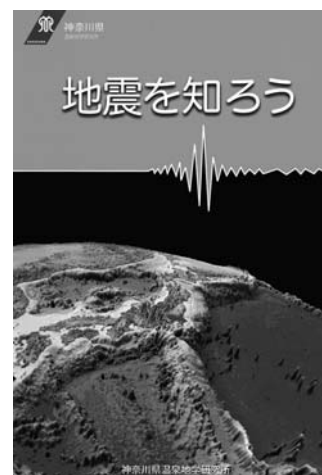
【資料紹介】『地震を知ろう』（神奈川県温泉地学研究所2007年4月）

地震について、わかりやすくコンパクトにしかも最新の科学の知見をふまえてまとめられた、非常に素晴らしい冊子です（A4版48ページ・カラー）。高校生を対象にした冊子ですが、あらゆる市民が常識として心得ておきたい内容ですので、ここに紹介します。

「地震と防災対策の現状」

- 第1章 大地震は私たちの町にも必ずやってくる
- 第2章 首都直下地震はいつおきるのか
- 第3章 巨大地震は近づいている
- 第4章 地震に立ち向かう

「研究者インタビュー」「神奈川県温泉地学研究所の紹介」から成っています。幸いなことに、神奈川県温泉地学研究所のホームページの「地震を知ろう」PDF版配布のお知らせから無料でダウンロードできます（15MB）。ぜひお読み下さい。



第25回市民科学講座
「中古民家主義」への誘い
 ～東京や周辺の普通の家々を覗く～

そういえばいつも見かける町の風景の中身って、どうなっているんだろう。そして誰がどうやって住んでいるんだろう。看板建築の商店、銭湯の裏側、町工場の内部、町家建築の妙味、住宅街の戸建て、団地……。重要文化財として後年に残されそうもない、庶民が住むその辺の「中古民家」に魅せられて、写真と図面と文章で記録を重ねてきた真鍋じゅんこさんと鴫田康則さん。それらの記録をまとめた真鍋さんの新著『中古民家主義』に収められた、あるいは収めきれなかった「美しい普通の家の数々」を、スライド・トークで紹介。当日はトークに先だて1時間ほど、本郷や小石川界隈を真鍋さんたちと巡る「中古民家巡り」も行います。ふるってご参加下さい。

日時：**2008年3月15日(土) 18:30～21:00** (18時開場)

場所：アカデミー文京・学習室 (文京シビックセンター地下1階)

(地下鉄「春日」駅、「後樂園」駅すぐそば)

講師：**真鍋じゅんこさん+鴫田康則さん+アーサさん**

参加費：1,000円 (中古民家巡りは無料です)

※中古民家巡り参加希望者は、事前にその旨をお知らせ下さい。
 午後5時に市民科学研究所の事務所(本郷6-18-1)に集合してから出発します。

お問い合わせ＆お申し込み先：NPO法人市民科学研究所



市民科学研究所とは

市民科学研究所は次の3つのことがらを促進するNPO法人です。

1. 科学技術にかかわる様々な意思決定や政策形成への市民参加
2. 様々な社会問題の解決に向けた専門知の適正な活用
3. “持続可能で生き生きとした生活”を実現するための科学研究や教育の実践

市民の問題認識力を高めるための講座や勉強会を運営し、市民が主体となった調査研究や政策提言や支援事業をすすめています。“リビングサイエンス”(生活を基点にした科学技術)という概念を手がかりに様々な角度から「生活者にとってよりよい科学技術とは」を考えそのアイデアを実現していこうとしています。

電磁波の健康影響を考えるシンポジウム

WHOの環境保健基準発表を受けて

今回のシンポジウムは、「WHOの環境保健基準」および「経産省のWG報告書の内容と問題点」を正しく理解し、私たち市民の健康を守るための電磁波対策はどうあるべきか、について考えていく契機にします。

日時：**4月13日(日) 13:15～18:50** (12:45開場)

場所：東京ウィメンズプラザホール

渋谷区神宮前5-53-67

(電話 03-5467-1711、地下鉄表参道駅B2出口から徒歩10分)

詳しくは同封のチラシをご覧ください。



アースディ2008 出展企画

「科学で迫る食育・地球環境」

エコロジーの根っこに科学がある!

食育に役立つ味覚実験や顕微鏡観察、

地球の大気循環を理解するミニモデルの組み立てなど、いろいろな科学プログラムを体験してみませんか。

日時：**4月19日(土)および20日(日)**

会場：代々木公園メイン会場

発酵やダシや穀物について、その特長を科学的にとらえる種々の実験メニュー(顕微鏡観察を含む)やクイズを用意し、市民科学研究所のスタッフが展示パネルやパンフレットを使って来場者とともに、簡単な実験や問答を行います。

- (1) 日常生活の中から科学を学び、エコロジカルな生活を創るためにそれを生かしていくことの大切さを感じてもらうこと、
 - (2) エコロジーの基本にかかわる、地球の大気循環やエネルギーの流れを視覚的に理解するための模型を展示し、温暖化をはじめとする地球環境問題への科学的アプローチへの関心を抱いてもらうこと、
- が今回の企画の目標です。

あなたも会員になりませんか

どなたでもいつでも入会ができます。次の3つのサービスを提供いたします。

- ①月刊「市民科学」で紹介された記事や論文の全文をホームページからダウンロードできます。
- ②毎月行われる「市民科学講座」の資料をダウンロードできます。
- ③年に2回、「市民科学」で紹介された主要記事・論文をまとめた『市民科学 セレクション』(80ページ)が届けられます。

次の3種類の会員があります。

- ★ダーウィン会員……年会費3,000円 ①+②
- ★ファーブル会員……年会費6,000円 ①+②+③
- ★レイチェル会員……年会費10,000円 ①+②+③+講座費免除

詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.csij.org/>